

施設生活を送る上での「ファッション」への意識

柳井ひまわり園 生活支援員 利光 哲也

1. はじめに

今回このテーマで書こうと思ったきっかけは、今から十数年前、私が専門学校に通っていた時の経験である。当時、実習生としてある知的障害者施設に行ったのだが、その女性棟利用者の髪型が、全員画一的な、無個性なものに見えたのである。施設のその時期の内情、支援方針などもあると思うので、一概に批判するということはできないが、個別化の原則の視点からも、それが決して当たり前であってはいけなないと、当時の私は感じていた。

私たちは外出するとき、人と会うとき、特別な時間を送るときには、その場に応じた被服・髪型・装飾品を身に付ける。また、憧れている芸能人やキャラクターと同じような服を身に付けてみたいという欲求もあると思うし（コスプレなどもその範疇に含まれる）、意思の表現としての被服もあると思う（好きなアーティストのTシャツなど）。ある程度高価な衣服や装飾品を身に付けることも、生活の質を高める上で考えるべきことだと思う。ファッションは自己表現の一つとして、非常に重要な概念である。ただ、我々は普段施設生活を送る上で、利用者のファッションについて、どれだけ意識することがあるだろうか。今身に付けている衣装に、利用者の意思は尊重されているだろうか。機能性だけにとらわれて、利用者の満足度を高める物に果たしてなっているだろうか。一度立ち止まって考えてみる必要があると思った。

多様性が求められる現在、施設利用者のファッションも様々なものがあって然るべきである。今回は当施設がこれまで行ってきた、利用者へのファッション面への取組み、そしてこれから、どのような支援を行っていくべきか、考えてみたいと思う。

2. アンケート調査

今回のテーマを書く上で、はじめに当施設職員にアンケート調査を実施した。項目は以下の通りである。選択項目は、該当項目に○をつける形としている。

- ① 利用者の中で、ファッション誌など美容面のメディアに興味を持たれている方はおられるか。
(いる ・ いない ・ どちらともいえない)
- ② 施設生活を送る中で、いわゆる「お洒落」と言う感覚の必要性をどの程度考えるか（装飾品をつける、髪を染める、パーマをかける、多少華美なメイクをする等）。
(必要 ・ 必要でない ・ どちらともいえない)
- ③ 利用者からの要望で、実際に何らかの支援を実施した例はあるか。具体例を自由記入でお願いします。その支援を行った事で、利用者の情緒面にどのような効果があったか等もあればお願いします (ex. 美容室に行った、化粧品を購入した、ブランドないしデザインを考慮した衣類を買った等)。
- ④ その他、ご意見等があればお願いします。

これらの項目のアンケートを行い、最終的に20名からの回答を得た。
はじめに、①・②の選択項目の集計は以下ようになった。

- ① いる 6名
いない 6名
どちらともいえない 8名
- ② 必要 11名
必要でない 0名
どちらともいえない 9名

まず、利用者のファッションへの意識については、多くの職員がいない・わからないという回答であった。普段そういう事を意識する機会が少ないからだと思われる。一方で、お洒落の感覚の必要性については、過半数以上の職員が必要と回答した。

自由回答の③・④については、以下のような回答を得ることができた。若干文章を整理したうえで、幾つか紹介する。

- ③
 - ・以前入所していた利用者で、ここでの散髪ではなく美容院に行ってみたいとの要望があり、お店を職員で探した。カットなどは自分で購入した雑誌を持っていき、雑誌の中から気に入ったカットをチョイスした。いつもと違う散髪であり、シャンプーなども行って頂き、このようなことがあるのだと初めて知ったようであった。
 - ・ご自分で化粧をされていた方がおられた。周りから「可愛い」と声をかけられ、嬉しそうにしておられた。毎日続けられたのが印象的だった。外出（旅行）や行事の際、いつもよりおしゃれな衣服を購入したり、化粧したりしていた。
 - ・白髪染めの希望があり、対応すると喜んでいた。
 - ・本人から欲しい靴の指定を受けて購入した。受け取った時には笑顔で過ごされ、他の職員にも見せに行っていた。
 - ・三つ編みなど、希望する髪型に結んだ。
 - ・テレビを観られていた利用者で、テレビの前に職員を連れて行き、この人の髪型がいいと指さされたため、その人の髪型に似せた髪を結った。不穏状態が落ち着き、満足されていたように感じる。
- ④
 - ・盆踊りで、普段着る機会のない浴衣を着て、皆とても喜ばれていた。車椅子の利用者も「私も浴衣が着たい」との要望があり、通常、帯は後ろで結ぶものであるが、後ろで帯を付けることは難しいため、前側で結ぶことで着ることができた。ご本人はとても喜ばれていた。普段は化粧をすることもなく、この機会に化粧をすると、いつもと違った自分にびっくりされていた。
 - ・特に女性利用者は、服や髪型などに興味があると思う。男性利用者でも俳優さんの髪型などにしてみたいと、聞けば答えていた。皆想いがあるので、金銭面の問題もあるが、対応できることはしたいと思う。
 - ・男性利用者は保護者（母親）任せが多く、自分なりのファッションを楽しんでいる方は少

数。支援（買物）をする場合には、保護者の思いを大切に行うようにしている。

- ・怪我につながる装飾品もあるかもしれない。これらを扱う上での、適切なガイドラインを設定することが必要ではないか。
- ・利用者も一人の女性であり、例えば盆踊りであれば浴衣を着て、下駄を履き、化粧もする。我々と同じ感覚がある。相手に何かを伝えようとするなら、外観は大きな事柄だと思う。
- ・人の第一印象は外観。それによってある程度中身も判断してしまいがちなので、しっかり自分らしさをアピールできるようにしてあげられると良いと思う。
- ・特に女性はお化粧をしたら嬉しいと思うので、ボランティアでそのような方がいたら、お願いするのも良いのかなと思う。

回答を読んだ印象としては、外出や催し物に参加する機会には良いファッションを提供したいという意見が多かったように思う。自己表現というよりは、整容面への対応という印象はあった。ただ、浴衣や化粧をする機会でも利用者が新たな自分の姿を再発見しているようでもあった。

外見を変えることで、人とのコミュニケーションに良い効果を与えるという意識は、利用者・職員共に普段から持っておきたいと思う。

今回の研究集録を書くうえで、「知的障害 ファッション」というキーワードで検索をかけてみるところ、そのテーマを題材にした専門雑誌を発行している団体が存在したり、ダウン症の女性モデルがいたりなど、この問題意識を持って活動している向きも幾つかあるようである。ただ、まだまだ一般的には認知度が乏しいことや、どの程度障害者側の意見を反映して行っているか（健常者側の気持ちが先行していないか）更に情報が欲しい部分ではあると思った。

3. 実例（衣類や化粧品、装飾品の写真添付）

当施設の利用者で、ファッション性を意識した衣類や物品を持っている人がいるか、職員にも聞いた上で質問したところ、ある程度自己決定ができる数名の利用者がそれらを所有していた。幾つか写真を添付した上で紹介する。

① 男性Aさん

スーツを数着所有。外出や冠婚葬祭の場面に多く着用。



② 女性Bさん

催し物に参加する際などに着用するワンピースを数着所有。ご本人はフルート演奏が趣味であり、演奏する時などに好まれて着用されている。



また、メイクアップ道具も所有されていた。まつ毛用のビューラーも所有されており、男性棟にいと中々見る機会がないため驚いた。



また男性棟利用者では、ストリートファッションのようなデザインの衣類を好んで着ている方もおられた。購入は主に保護者が対応しているが、買う際にある程度本人の好みを反映するよう配慮されているようである。最近では普及品でもかなりデザイン性が高いものも多く、買物を代行する際にも、事前に本人の好みを聞き把握しておくことで、個性を表現できるのではと思う。

好きなスポーツチームのユニフォームを着ておられる方もいる。若干普段着として着るにはデザイン的に派手かなと思う部分もあるが、自己表現の一つとして考えれば、ある程度受容すべきかと思う。

散髪については、毎月一回地域の理髪店が当施設に出張して下さっている。ヘアスタイルに関

しては一任している部分が多いが、利用者からの要望があれば、それに合わせて切って頂いている。主に男性利用者が多く利用し、女性利用者はこれまで支援員が切る機会が多かったが、本年度からは女性利用者も切って頂く機会が増えた。

過去の利用者の中には、髪の色を脱色していた女性利用者もおられた。退所された方なので、その当時の想いなどを聞くことはできないが、年齢的に若い利用者だったので、恐らく当時の担当職員に要望し、脱色してもらったのだと思う。私はその後の本人の姿しか見ていなかったが、髪色を変えるだけで、随分と印象は変わるものだった。

4. 「価値」の提供

私たちがファッションを楽しむ理由は何かと考えた場合、それまでの生き方、価値観の表現であると考えられる。通常生活を送る中で、ある程度のTPOに合わせた衣類や装飾品を選ばないと、それはある種滑稽なものになってしまう。高価な衣類や装飾品への憧れはあるが、身の丈に合わせたものでなければ、それは真の意味での「お洒落」とは言えない。

ただし、それが利用者の身に着けるものを限定する理由とはならない。私たちは固定概念で、「施設利用者が着る衣服はこういうもの」というイメージを、先行して持つてはいないだろうか。

5. 安全確保、また用具の自己管理について

ファッションアイテムには、障害者が扱う場合には危険が伴うものも多い。例えばネックレスやペンダントなどは扱い方を間違えると窒息事故につながるし、指輪や腕時計などはそれ自身が武器にもなりえる物である。生活を行う上では、十分な安全確保をした上でファッションを楽しむことが必要不可欠となる。

また先ほどの髪の色脱色に関しても、頭皮への負担なども考えると、中々頻繁に行えるものではない。白髪染めなどに関しても同様である。

また、用具の適切な自己管理ができるかどうかも問題となる。前項のBさんのように、まつ毛ビューラーのような用具を自己管理できる利用者が、まだまだ少数派であることは事実である。例えばシャンプーひとつとっても、必要以上の量を使ったりする方もおられる。高価な着物なども管理が難しく、紛失や汚染のリスクも考えると個人管理は現実的ではない。そういったことを考慮すると、安全にお洒落を楽しむためには、対象者別のアクセサリを適切に取り扱うためのガイドラインは必要不可欠だと思った。

6. おわりに

「お洒落」の感覚を身に付けるためには、それを学ぶための「体験」が必要である。どのような見た目が人に好印象を与えるか、場面においての服装の選び方はどうすべきか、どういった場所で理容・美容を受けられるかなどの情報提供を、日々の生活の中で伝えていくことが重要である。そして利用者側から要望が出たら、個別外出等を積極的に計画し、買い物や理容・美容体験を推し進めていければと思う。

近年新型コロナウイルスの出現で、様々な機会提供の場が失われていた。本来お洒落感覚を体験できるはずの各種行事もなくなっていたし、個別外出で買い物をすることもできなかった。今年より感染法上の位置づけが変更になったので、今後は再び様々な機会の提供を行えたらと思う。

安全面への配慮は、ニーズが出たら、そのつど個別支援計画に盛り込んで対応するとよいと思う。仮にピアスなど、危険を伴うアクセサリに興味を持つ利用者がいたとしても、「これはできない」と初めから決めつけるのではなく、「ではどうしたら実現できるだろうか」という発想で、検討すること、行動に移すこと、挑戦することは大切ではないだろうか。

ファッションを楽しむことは、ある種のレクリエーションと捉えることもできる。精神的な充足を得て頂くために、私たちは常に創意工夫し、チャレンジしていくべきではないかを感じる。